



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日语综合教程

第八册

皮细庚 编著

前瞻性与创新性并重：
符合21世纪日语人才培养需要，引领中国日语教学潮流。

代表性与权威性兼顾：
全国20余所高校参与编写，日语界近百位专家精心奉献。

系统性与呼应性结合：
涵盖高校日语专业各类课程，形成相互呼应的有机整体。

上海外语教育出版社
SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日语综合教程

第八册

皮细庚 编著

图书在版编目 (CIP) 数据

日语综合教程. 第8册 / 皮细庚编著.

—上海: 上海外语教育出版社, 2017

(新世纪高等学校日语专业本科生系列教材)

ISBN 978-7-5446-4965-0

I. ①日… II. ①皮… III. ①日语—高等学校—教材 IV. H369.39

中国版本图书馆CIP数据核字 (2017) 第120395号

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 应 允

印 刷: 常熟高专印刷有限公司

开 本: 787×1092 1/16 印张 12.75 字数 391千字

版 次: 2017年6月第1版 2017年9月第2次印刷

印 数: 2 100册

书 号: ISBN 978-7-5446-4965-0 / H · 2193

定 价: 33.00元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

日语综合教程（第八册）

配套MP3录音下载

本书提供配套MP3录音，支持电脑下载及“爱听外语”移动应用下载。

电脑下载

登录外教社有声资源网 (<http://audio.sflep.com>)，
添加验证码：**7886r47s**，下载本书配套MP3录音。

“爱听外语”移动应用下载



本移动应用支持iOS和Android系统。

1. 如手机尚未安装“爱听外语”移动应用，请扫描左边的“爱听外语”二维码，下载并安装该应用。
2. 启动“爱听外语”移动应用，使用“图书扫描”功能扫描左边的二维码，获取本书配套MP3录音。

若有相关问题，欢迎与我们联系。

邮箱：service@sflep.com；技术支持电话：021-65319409

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材编委会

总主编:

谭晶华

编委: (以姓氏笔画为序)

王 勇	浙江工商大学
王健宜	南开大学
叶 琳	南京大学
皮细庚	上海外国语大学
许慈惠	上海外国语大学
纪太平	厦门大学
杨诒人	广东外语外贸大学
严安生	北京外国语大学
吴 侃	同济大学
吴大纲	上海外国语大学
陈 岩	大连外国语学院
张 威	清华大学
陆留弟	华东师范大学
庞志春	复旦大学
胡振平	解放军外国语学院
修 刚	天津外国语学院
洪栖川	东北师范大学
高 宁	华东师范大学
高文汉	山东大学
宿久高	吉林大学
谭晶华	上海外国语大学

总序

21世纪是一个国际化的高科技时代，也是一个由工业社会进一步向信息社会转化的时代。科学技术的高速发展、新兴交叉学科的涌现、人文文化与科学技术间的相互渗透和融合、社会的信息化以及知识、信息传播技术的日新月异加强了世界各国文化的交流、碰撞与合作。要想在激烈的世界竞争中立于不败之地，就要占领人才培养的制高点，培养出世界一流的高素质、高水平人才。

由于社会对外语人才的需求已呈多元化趋势，以往那种单一外语专业的基础技能型人才受到挑战。今后我们仍然需要培养《源氏物语》的专门研究家，但是高校外语专业的教学必须从过去的“经院式”人才培养模式向宽口径、应用性、复合型人才培养模式转化。社会要的不光是懂外语的毕业生，还需要思维敏捷、心理健康、知识面广博、综合能力强的精通外语的专门人才。

我国的外语教学界已充分认识到，对国家建设发展急需的外语专业人才加大培养力度，提高其能力和素质是一项迫在眉睫的任务。随着我国日语专业教学点设置的不断增加和招生规模的逐年扩大，日语专业本科生的教学改革、学科建设及教材出版亦取得很大的成绩，各地先后出版了一批在全国有影响的优秀教材。正因为社会对日语人才的培养提出了更高的标准，同时对日语学科的建设也提出了新的要求，因此，日语本科生教材的编写和出版也应该顺应潮流，开拓创新。

我国外语教材和图书出版的基地、领头羊之一的上海外语教育出版社(外教社)以高度的责任感和高瞻远瞩的视野，在充分调研的基础上，抓住机遇，于2003年8月邀请了全国主要外语院校和教育部重点综合大学日语专业的近20位专家在上海召开了“全国高等学校日语专业本科生系列教材编写委员会会议”。代表们完全认同编写“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的必要性、可行性及紧迫性，并对编写立意、教材构建、编写审校程序提出了许多积极、中肯的建议和要求。之后，外教社又多次召开全国及上海地区专家学者会议，分头撰写编写大纲，确定教材类别、项目，讨论审核样稿。经过两年多的努力，终于迎来了第一批书稿的付梓。

本套教材共分语言知识、语言技能、语言学与文学、语言学与文化、语言学与翻译(中日对译)、人文科学、经济贸易、测试与教学法等若干个板块，可以说几乎涵盖了当前我国日语专业所开设的全部课程。编写内容根据因材施教的原

则，深入浅出，反映各个学科领域的最新研究成果；编写体例采用国家最新有关标准，力求科学、严谨；编写思想贯彻了在帮助学生打下扎实的语言基本功的基础上，培养学生分析和解决问题能力的原则，全面提高学生的人文、科学素养，养成健康向上的人生观，成为合格的外语专门人才。

本套教材编写委员会云集了我国日语界学者专家，其中不少是高等学校外语专业指导委员会的委员。每一种教材均由编写委员会的专家们仔细审阅后确定，有的是从数种候选教材中遴选，总体上代表了中国日语教材学发展的方向 and 水平。我们相信，外教社这套“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的编写和出版，一定会促进和提高我国日语专业本科生教学质量的稳步提高，其前瞻性、先进性和创新性也将为日语教材的编写拓展更为广阔的视野。

谭晶华

上海外国语大学常务副校长

前言

日语专业教学大纲中指出：教材是师生在教学活动中的依据，选用或编写合适的教材是搞好教学的保证。教材的题材要广泛，并且比例适当，要注重实践性，适当编写包括日本社会、文化、风俗习惯以及科普常识方面的文章。语言要规范、生动、丰富。文章体裁要多样化，掌握好教材的难度。

日语专业高年级教材在过去 20 多年间出过少量的几套，由于当时日语专业高年级教学大纲尚未制定，现在看来，已出的教材与教学大纲的规定尚有一些距离，也不很符合教学大纲的规定。近年来，随着我国高等教育走向大众化，设置日语本科专业的学校越来越多，各校都急切地期待着高质量的日语专业高年级教材更早更多地问世，以备各大学择优使用。

本套日语专业高年级教材作为本科高年级综合日语课的主干教材，力图贯彻教学大纲规定的要求，编出符合目前日语专业现状的适用教材，既注重语言知识的传授、语言技能的训练，又顾及日本社会、文化的介绍和理解。本套教材的框架设计、布局结构将有助于提高学生的思维创造和分析鉴赏能力。

本套教材经申报，已批准为教育部“十五”重点教材建设项目，谭晶华教授为总主编，第五册由陆静华教授编写，第六册由陈小芬教授编写，第七册由季林根教授编写，第八册由皮细庚教授编写，编成后的油印教材均经过两轮以上的使用，并广泛听取了中、外教师的意见，几经修改而成。

愿本套教材的推出为中国日语专业本科教育更上一层楼贡献绵薄之力，相信我国的日语本科专业建设一定会有更蓬勃的发展。

总主编

2007年6月

编者的话

《日语综合教程》(五一八)的第八册,与前面3册教材一样,经过了两轮试用和修改,终于也要出版了。至此,作为一套完整的日语专业高年级教材,同时也是一套“十五”国家级规划教材,得以展现其完整的面貌,奉献给广大的日语学习者,我们衷心地希望这套教材能够对国内的日语教学起到一定的促进作用,同时也希望这套教材能够为广大的使用者所接受,所喜爱。

第八册的编写,秉承本套教材的一贯宗旨,在选材时既考虑到语言教学的精益求精的要求,同时更注重文章内容的筛选和组合。按照《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》的要求,精读课既要注意文章体裁的多样性,更要兼顾文章题材的广泛性。考虑文章体裁的多样性,是为了提高语言教学的质量和完善日语学习者的语言知识面;考虑文章题材的广泛性,是为了使日语学习者对日本的现实和历史的方方面面有一个更全面的了解。为此,作为本套教材的最后一册,本册教材在筛选文章时,在充分考虑语言规范和思想内容的基础上,更多的是注重文章体裁和题材的完整性。因此,在文章体裁方面我们增加了日本的汉译日文章,即第5课《故乡》(鲁迅作品的日语译文),而第9课《古典》和第10课《汉文训读》则兼有题材和体裁两方面的思考,《古典》一课包含有古典物语、随笔以及课外阅读中的古典和歌,《汉文训读》包含有汉文、汉诗以及课外阅读中的日本人创作的汉文、汉诗。

第八册教材如果说与前3册教材在编写思路略有不同的话,那就是更加强调日语学习者的自主性学习。其原因是不言而喻的。因为无论是在校学生还是社会学习者,他们都已经具备了较为扎实的语言基本功和语言理解能力以及对日本的各种了解,而且在客观上也不能像以往的精读课那样投入大量的授课时间,这既没有可能,也没有必要。简而言之,第八册教材强调日语学习者的自主学习和独立思考。基于以上思路,第八册教材的编写内容与前面各册略有不同之处,下面简要作几点说明。

1. 如前面所说,第八册在充分考虑语言规范和思想内容的基础上,更多的是注重文章体裁和题材的完整性。为此,第八册的文章选择既不拘泥于

语言上的高难度，也不回避语言上的高难度。

2. 第八册与前面各册一样，在课文之后有“单词表”和“语言与表达”。但是，“单词表”不再考虑列出课文中出现的所有的新词语，只考虑列出有一定难度的和值得提示的部分词语；“语言与表达”也不再以基础语法解释为主，而是以课文中的原文为线索，分析句中起重要语法作用的词语或句型的意义、作用以及使用时值得注意的问题。
3. 如上所述，第八册强调学生的自主性学习和独立思考。因此，这一册教材在“学习指南”和“练习”两个部分主要是针对课文内容提出思考问题，除少量的语言问题之外，大多是对文章的内容结构、人物心理、社会背景以及作者的写作意图和思想意识进行提问。此外，每一课的“练习”部分都增加了一篇读解文，其内容尽量与课文内容有一定的关系，目的在于从不同的角度扩展有关方面的知识，同时也给日语学习者提供更多的思考和练习的机会。基于同样的目的，考虑到课外阅读文章是有意识地安排在整个教材中的有机组成部分，本册教材在每一篇课外阅读文章后面也增设了“学习指南”一项。

第八册教材在整个编写过程中，曾经得到日语专家山崎道生和稻森信昭两位先生的大力帮助，特别是稻森先生在第八册教材的整个试用过程中，对文章的选择和编写内容的斟酌，给予了悉心的指导，在此谨向两位先生表示衷心的感谢。

同时，对支持本教材编写工作的上海外国语大学的有关老师和上海外语教育出版社以及责任编辑应允女士表示衷心的感谢。

限于编者的能力和时间，本册教材难免有种种不尽如人意之处，或者说可能存在某些缺点和错误，敬请各位批评指正。

编者

于2007年8月

目次

第1課 漢字の性格 1

- ◆ 本文
- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習
- ◆ 読み物 言葉についての新しい認識

第2課 日本の渚 16

- ◆ 本文
- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習
- ◆ 読み物 飛翔

第3課 羅生門 33

- ◆ 本文
- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習
- ◆ 読み物 セメント樽の中の手紙

第4課 故郷 50

- ◆ 本文
- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き

- ◆ 練習
- ◆ 読み物 山月記

第 5 課

エッセイ 73

橋を架ける

- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習

木のぬくもり

- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習

心が生れた惑星

- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習
- ◆ 読み物 人は獣に及ばず

第 6 課

TUGUMI —告白— 97

- ◆ 本文
- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習
- ◆ 読み物 癒しとしての死の哲学

第 7 課

新しいパラダイムを求めて 117

- ◆ 本文
- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き

- ◆ 練習
- ◆ 読み物 現代日本の開化

第 8 課

文化と理解 143

- ◆ 本文
- ◆ 注釈
- ◆ 新しい言葉
- ◆ 言葉と表現
- ◆ 学習の手引き
- ◆ 練習
- ◆ 読み物 出たがりと引っ込み

第 9 課

古典 158

- ◆ 一 古典の文章に親しむ
- ◆ 二 物語 竹取物語 源氏物語 平家物語
- ◆ 三 随筆 枕草子 方丈記 徒然草
- ◆ 読み物 古代の和歌
万葉集 古今和歌集 新古今和歌集

第 10 課

漢文訓読 177

- ◆ 一 訓点について
- ◆ 二 漢詩を読む
- ◆ 三 漢文を読む
- ◆ 読み物 日本の漢文学

漢字の性格

本文

きん だ い ち は る ひ こ
■ 金田一春彦

日本語を文字の面から眺めてみますと、一番大きな特色は、日本語はさまざまな字を使う言語だということです。

調布市青山二—13—3 ゆりが丘ハイムA 206

これは、私の勤め先の同僚である人の住所なのですが、これを見ていただきますと、「調布市青山」——漢字、「二」は漢数字ですが、「13」と「3」はアラビア数字、「ゆりが丘」——平仮名と漢字、「ハイム」は片仮名、「A 206」にはローマ字まで使っている。皆さんがたにとっては何でもない、ごく普通の文字使いとお思いかもしれませんが、こういった複雑な文字を組み合わせている国は、地球上ほかにはないと思います。日本人は、子どものときからこういう文字の使い方に慣れております。

世界の文字は、大きく分けて、表音文字と表意文字の二つに分かれます。表音文字といいますと、文字が音だけを表すもので、たとえば、仮名などは代表的なものです。「キ」という文字は「キ」という音だけを表しますから、「キ」という音が使われる言葉なら何にでも使えます。「キジ」でも「キイロ」でも「キ」が書けます。

それに対して、表意文字というのは、発音といっしょに意味を表す文字で、漢字はその代表です。たとえば「木」という文字は「キ」という音も表しますが、同時に草木の「木」を表しますから「キジ(雉)」を「木地」と書くわけにいかない。それでは「木の地」という意味になってしまう。もし「黄色」を「木色」と書いたらこれは木の色になってしまいますから、こういうことは許されない。つまり、漢字というものは、発音だけではなくて、いっしょに意味も表すという特殊な文字だということになります。

世界の文字は、多くは、仮名、ローマ字、ハングル(朝鮮半島で使用されている文字)、あるいは昔のギリシアの文字など表音文字です。発音だけしか表しません。このほかに、インドの文字、アラビアの文字なども表音文字です。

ローマ字 I love you.

ハングル 나는 당신을 사랑합니다.

アラビア文字

أحبك

世界の文字

漢字はその点大変珍しい文字です。発音のほかに意味も表す表意文字というのは漢字のほかには、強いて言えば、アラビア数字——1、2、3、……がそうです。「1」は「イチ」と読み、数のイチを表すときにしか使えませんから、「位置」の代わりに使って、「横浜市は東京の南に1する」と書くことはできません。この間、私のところへ来た手紙に「金田1」様というのがありまして、妙な感じがいたしました。これは表意文字の一種でありますから、やたらに使えないのです。もっとも数字は数しか表せませんから、表意文字のうちでも特殊なものです。

われわれ日本人は漢字という文字に慣れていますが、欧米人の目には随分珍しい文字と映るようです。神秘的な呪文のように思われるそうです。

映 合 東

ろ。で人が
石炭を
ストーブ
に入れて
いると
ころ

が掲示板
の向こう
に富士山
がそびえ
ていると
ころ

オーケストラ
の譜面台

欧米人からみた漢字のイメージ

これは、いつかある週刊誌に出ていたことですが、欧米人にとっては、「東」という字は、オーケストラの譜面台に見えるそうです。「合」の字は、掲示板の向こうに富士山がそびえている形に見えるそうです。「映」という字に至っては人がストーブにシャベルで石炭か何かを入れている形に見えるそうですが、これはうまいですね。

漢字の第一の重要な性質は、表意性、つまり、ほかの文字と違いまして、発音を表すと同時に意味も表すということです。仮名、ローマ字は発音しか表さない。漢字は意味も表すということで、漢字は強い印象を与えるということがあります。

たとえば、街を歩いていて、トラックに硫酸でも積んであるのか、「危」と

いう漢字が書いてありますと、ちょっと見ていかにも危ない感じがします。これが平仮名で「あぶない」と書いてあったり、ローマ字で「abunai」と書いてあったのでは、それほど危険というような印象を受けません。作家の三島由紀夫さんはカニが嫌いだったそうです。料理屋へ行ってお膳の上にカニが出てきますと、しりごみをし、顔色が変わったそうです。「蟹」という文字を見ても鳥肌が立ったというのです。これは、おそらく漢字で書いてあったからで、平仮名で「かに」と書いてあれば、そういう気持ちにはならなかったのではないのでしょうか。漢字というものは、そういう特別の効果・力を持つものです。

また、漢字は意味を表すということで、時には読めなくても実際に用を果たすということがあります。そのために簡潔に書けるという性質があります。代表的なのは、新聞などで見ます野球の成績表です。「東軍」とか「西軍」とかのチーム名の右の方に「打」「得」「安」「点」「振」「球」「犠」「盗」「失」と書いてあって、下に35 4 10……と数字が書いてある。この漢字は一体どう読むのか。トク、アン、……でいいのか、「安」と書いてヒットと読むのか、私にはわかりませんが、意味はそれでわかりますね。「打」は打数の意味、その次の「得」は得点の意味だとか、「安」はヒットの意味だとか、「点」は打点でしょうね。以下、三振、四球の意味だとわかる。これは漢字の力であります。

東軍		打	得	安	点	振	球	犠	盗	失
(遊)	山田	5	1	2	0	1	0	0	0	0
(三)	小川	4	1	2	1	1	0	0	0	0
(三)	三山	3	0	0	0	2	0	1	0	0
(中)	西村	3	0	1	0	0	1	0	0	0
(一)	二山	4	0	1	1	2	0	0	0	0
(一)	二山	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(一)	二山	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(一)	二山	2	0	0	0	0	0	0	0	0
(打)	左大	2	1	1	0	0	0	0	0	0
(打)	左大	2	1	1	0	0	0	0	0	0
(捕)	高水	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(捕)	高水	4	1	1	2	0	0	0	0	1
(捕)	高水	4	0	2	0	2	0	0	0	0
(捕)	高水	2	0	0	0	0	0	0	0	0
(捕)	高水	2	0	0	0	0	0	0	0	0
(捕)	高水	1	0	0	0	1	0	0	0	0
(捕)	高水	1	0	0	0	1	0	0	0	0
残塁		6	35	4	10	4	10	1	1	0

西軍		打	得	安	点	振	球	犠	盗	失
(遊)	石田	3	2	0	1	0	1	1	3	1
(一)	山口	3	1	1	0	1	1	0	1	0
(一)	山口	4	1	3	1	0	0	0	0	0
(二)	中島	3	1	2	1	0	0	1	0	1
(二)	中島	3	0	1	1	0	0	1	0	0
(三)	小本	4	0	2	2	0	0	0	0	1
(三)	小本	4	0	2	2	0	0	0	0	1
(中)	荒木	3	1	1	0	0	1	0	0	0
(中)	荒木	3	1	1	0	0	1	0	0	0
(捕)	中野	2	1	1	0	0	1	1	0	0
(捕)	中野	2	0	1	1	0	0	1	0	0
(捕)	中野	2	0	1	1	0	0	2	0	1
残塁		6	27	7	12	7	1	4	6	4

野球の成績表

この漢字の性質を有効に使ったものは、新聞の求人広告です。たとえば「事務経理多少 高卒年32迄」——これは事務員を求めているわけですが、経理の多少できる人、高校卒業程度、年は三十二歳までの人。次に「固給15万」とあるのは、固定給十五万円ということでしょうか。「隔土休」は隔週の土曜日が休み。その次の「歴持」というのは履歴書持参という意味でしょうね。「細面」というのは別に細おもての人という意味じゃないようで、「委細面談」という意味。これだけの意味をこんなに簡単に書けるということは漢字なればこそでありまして、仮名やローマ字ではとても書けるものではありません。

港 区 高 輪 二 16 社 保 完 C D 設 備 工 業 (0000) 0000	免 持 優 遇 ・ 保 管 工 ・ 歴 持 細 工 業 面 (0000) 0000	◎ 水 道 配 管 工	東 西 線 門 前 仲 町 A B 産 業 KK (0000) 0000	2 隔 土 休 歴 持 細 面 A B 産 業 KK (0000) 0000	經 理	事 務 經 理 多 少 固 給 高	卒 年 迄 1 賞 与 年	万 昇 給 年 1 賞 与 年
--	---	----------------------------	---	--	--------	---	---------------------------------	--------------------------------------

新聞の求人広告

漢字のそのような性格からして、新しい言葉ができた場合に漢字で書いてありますと意味がすぐわかる、といったようなことがあります。たとえば、「失語症」を英語で^{アフェイジア}aphasiaというそうであります。aphasiaというのはギリシア語からきた言葉で、イギリスの中学生には説明されなければ、意味はわからないそうです。a-というのは「何か欠如している」という意味、phas^{ファス}というのは「話す」という意味、そして-iaは名詞であることを表す接尾辞ということになって、ギリシア語を知っていればわかりますが、中学生ぐらいでは意味がとれない。ところが、漢字で書いた「失語症」のほうは「話すことを失う病気だ」と見当がつく。何か、ものが言えなくなる病気だろう、と小学生でもわかります。これがもし、仮名で書いてあったり、ローマ字で書いてあったりしたのでは、わからない。やはりこれは漢字の大きなプラスの面です。

漢字は表意文字であるところから、それを組み合わせますと新語がいくらでもできます。もっともこれらの語は、耳で聞いたのではさっぱりわかりませんが、意味の面からはすぐ理解できるという長所があります。

会社の「社」の字を“会社”という意味で使うと、いろいろな言葉ができます。「入社」——会社に出ること、「退社」——会社を退くこと、そのほか「入社」「来社」「帰社」「在社」……こういったことは、英語の単語では言えないと思います。「本社」「支社」「貴社」「当社」「弊社」「自社」「他社」あるいは「社内」とか「社告」とか、いろいろな言葉ができるというのは漢字なればこそでありまして、これは、仮名やローマ字を使っていたのでは、このような芸当はできません。

『日本語の特質』(1991)による